

## 資料

# 「牛棚」の記憶を残すために —『流水何曾洗是非—北大「牛棚」一角』著者インタビュー—

姜 若 冰

### 一、はじめに

2016年は、中国の文化大革命（正式名称は、「プロレタリア文化大革命」、以下略して「文革」という）の発動から数えて50年となる。

1966年から1976年まで、十年にわたって続いた中国の文革は、「四人組」の逮捕<sup>1</sup>で事実上終結した。1978年12月に「改革開放」政策の実施が決定され、1981年6月の中国共産党第十一期中央委員会第六回全体会議で「建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議（いわゆる『歴史決議』）」が採択され、文革は「指導者が誤って発動し、反革命集団に利用され、党、国家や

各族人民に重大な災難をもたらした内乱である」と全面否定された。

「歴史決議」の採択から四十年近く時間が過ぎ、著しい経済成長を遂げてきた現在の中国においては、文革はどのように認識されているか、文革開始50年という節目に当たり、再び考えなければならない課題だと思われる。

ちょうど節目に当たるこの年に、筆者は『流水何曾洗是非—北大「牛棚」一角』<sup>2</sup>（以下略して「本書」という）の日本語訳作業に参加するチャンスを得た。本書は、北京大学元副学長郝斌教授の文革回想録である。1966年、郝斌教授は北京大学歴史学部の若手教員として文革



北京大学西校門



著者郝斌教授（右）と

<sup>1</sup> 四人組とは、文化大革命を主導した江青（毛沢東夫人）、張春橋、姚文元、王洪文の四名のことを指す。中国では「四人幫」と呼ばれる。1976年10月に逮捕され、1980年最高人民法院特別法廷で有罪判決を受け、収監された。四人とも獄中で余生を送った。

<sup>2</sup> 2014年1月、台湾大塊文化出版によって繁体字版が上梓された。日本語による紹介は筆者の書評『東アジア研究』第65号（大阪経済法科大学アジア研究所、2016年3月）を参照されたい。

に巻き込まれ、当時三十代半ばの彼は、紅衛兵や大勢の民衆の前で批判され、「牛棚」と呼ばれる強制労働収容施設に入れられていた。50年が経とうとしているなか、郝斌教授はどのような心情で当時の記憶を辿り、この回想録を綴ったのか、翻訳作業中で出た幾つかの確認すべき問題を携えて、北京大学に著者を訪ねた。

## 二、著者を訪ねて

北京大学の西校門は、90年前の燕京大学時代に作られた、非常に格調高い建造物である。毛沢東の筆による「北京大学」の額を上方に掲げ、今でも北京大学のシンボルとして、記念撮影をする観光客でにぎわうスポットである。その西校門をくぐってすぐ、目の前に古風の佇まいを見せる「辦公樓<sup>3</sup>」がある。その応接間で、80歳を過ぎた郝斌教授は元気な姿で迎えてくれた。

なぜ、本書の執筆に至ったか、筆者の質問に郝斌教授は穏やかな表情で答えた。「80年代から90年代にかけて、北京大学の文革経験者による文革回想録が幾つか出版された。よく知られるものとして、例えば周一良教授の『畢竟是書生』<sup>4</sup>、季羨林教授の『牛棚雜憶』<sup>5</sup>が挙げられる。しかし今世紀に入ってからは、新たに出版されるものはさほど多くない。文革を全面的に否定した1981年の『歴史決議』は、四十年近い時を経て、取り上げられることも少なくなってきた。文革開始から半世紀が過ぎ去ろうとしている今、過去の教訓がまだ十分に汲み取れていないと思われる。このままにしておけば、文革

経験者は相次いでこの世を去っていくのみである。この現状に、危機感を抱いた。歴史は忘れてはいけないという思いで、本書を執筆した」という。

郝斌教授は1953年北京大學歴史学部に入學してから、今日までの60余年間、北京大學の歴史とともに人生を歩んできた。50年代建国当初の中国社会の雰囲気について、郝斌教授はとても高く評価している。「あの時は、人々は新中国を建設する一心で、隔たりなくお互い協力し合っていた。例えば、私はほかの任務で科目を別の担当教員に引き継いでもらった時、自分が心血を注いで作った講義ノートや資料などを、躊躇せず無償で提供した具合であった。私だけではなく、あの時は誰でもそうしていたのだ」という。海外からも数多くの人材が祖国建設のために帰国し、ましてや外国人まで魅せられて中国に理想を求めて移住する人がたくさんいるほどであった。あの時の民心や社会情勢を維持できればと郝斌教授は残念がっていた。

1950年代の半ば以降、政治運動が相次いでいた。社会の雰囲気が根本から一変したのは60年代後半の文革であった。ここで郝斌教授は本書では触れなかったエピソードを幾つか披露してくれた。

1つは、明清史研究で知られる歴史学部の商鴻達教授<sup>6</sup>のことである。「文革で初めて批判を受ける我われは、屈辱な姿勢を強いられた時、本能的に最初は反抗するのであったが、商先生だけは違って、まったく反抗の意思を見せずに平然とすべてを受け入れていたのである。ずっと不思議に思っていたけれど、のちによく

<sup>3</sup> 北京大学の学長や党総書記の執務室、中心的な行政機関が入っている建物、大学の重要な行事もここで行われることが多い。

<sup>4</sup> 北京十月文芸出版社、1998年。日本語版『つまりは書生—周一良自伝』は1995年東海大学出版会より出版された。

<sup>5</sup> 中共中央党校出版社、1998年。

<sup>6</sup> 商鴻達（1907-1983）、河北省出身。1929年から北京大学で学者、詩人劉半農氏に師事し文学を学んだが、劉氏の病没で専攻方向を転じて明清史専門家孟森氏に史学を学んだ。

考えて分かった、彼は五十年代からすでに『反革命』として批判されていたからであろう」。

「商先生に感動したことはもう一つある。周知のとおり、商先生は民国年間の清史研究大家であった孟森の弟子である。孟森が病気で亡くなってから、商先生は毎月自分の給料からお金を捻出して恩師の残された家族に経済支援をしていた。文革の窮地に陥り、僅かな生活費しか与えられなくなった時でも、彼は絶えることなく支援を続けたのであった」。

商先生は50年代から文革終了まで約25年間、専門分野の科目を教えることが許されなかったが、文革終了後、彼は研究と教学に復帰することができ、晩年に数多くの研究業績を残し、清史研究の若手人材を育てることもできた。いっぽう、文革の嵐に耐え切れず、自ら命を絶った人も多くいた。郝斌教授によれば、多い時は、二か月間に20数人の訃報が耳に届いたという。「臨時収容施設にされた第一体育館で批判対象たちが寝泊りしていたが、朝の点呼になっても起きてこない人がいた。布団をあけてみたら、中は血だらけで隣の人の布団まで滲みこんでいた。夜、布団の中で太ももの付け根にある大動脈を自分で切断して自殺したのだ。校内病院の院長だった彼は、最も確実な方法で自殺したのだ」。終始穏やかな郝斌教授は、この話になった時だけ、表情を曇らせていた。

当時暴力を振るった加害者、例えばかつての紅衛兵たちは、文革後に反省をしたのか。これは筆者が以前から抱いていた疑問である。郝斌教授の話の聞くと、一部の個人に反省が見られるものの、依然として不十分であることが分かった。

今回のインタビュー中、郝斌教授が新たに雑誌で公表された一篇の文章「截屏一瞥周一良」<sup>7</sup>を示してくれた。その文章の一節から、郝斌教

授の心中を察することができる：「文革期の暴力は、社会問題である。暴力を振るうことと侮辱を受けることに、大勢の人が巻き込まれていたのだ。当時では暴力を振るうことを鼓舞する社会全体の雰囲気濃厚であったから、多くの人が暴力の舞台上に押し上げられたのである。しかし今日では、謝罪する雰囲気も必要である。当時の暴力を振るう側と受ける側の両方を、謝罪すると謝罪を受けて相手を許すという舞台に押し上げていくことこそが、理にかなうのである。文革が終結してからこれだけの年数が過ぎたが、誰かがそのような舞台を組み立てようとしたのか？すでにあった二、三の階段でさえ、気付かないうちに取り壊されてしまったのだ（筆者訳）」。

本書は、筆者が今までに読んだ文革回想録とは、形式上異なっている点がある。各章の末尾に、章回小説のように二行の対句を用いて内容をまとめ、締めくくっている。章回小説は、宋代の盛り場で流行した講談の台本に由来し、日本でもよく知られる『三国志演義』はその代表の一つである。この独特な形式は、本書に語り物のような臨場感を与え、さらに深い思考を促す余韻を生み出した。ほかの回想録と同様に、そこに描かれた文革時代の人間ドラマは、極めて厳しい内容であったが、本書は、ひたすら苦しい経験を訴えるのではなく、被害者としての立場から離れた、郝斌教授の歴史学者としての眼差しも伴っている。いわば複眼的に文革を捉えているのである。このような表現方法を選んだ理由について尋ねてみると、郝斌教授は「意犹未尽（意はなお尽きぬ）」だったからとおっしゃった。本書に込めた郝斌教授の切なる思いを、重々しく感じ取った。

<sup>7</sup> 郝斌「截屏一瞥周一良」、『江淮文史』2017年第1期、

江淮文史雜誌社。

### 三、面影を探して

インタビューは2時間以上に及んだ。終了後、郝斌教授は北京大学のキャンパスを案内してくれた。書中でストーリーの舞台となる校内の各処を一々紹介してくださった。本書の日本語訳の第一部は、すでに『大阪経済法科大学論集』第111号（2016年10月、大阪経済法科大学経法学会）で公刊した。翻訳中で触れたこれらの場所に自らの足を実際に運んでみると、過去の歴史が脳裏に浮かびあがり、よりいっそう印象が深まった。



図1



図2



図3

つぎは、当時の歴史学部事務所所在地一三号院（図2）へ向かった。東グラウンドから未名湖畔に戻り、さらに南へ進むと、講義棟が立ち並ぶ教学区域となる。図書館のそばを通り過ぎ、第二体育館の北側に「静園」という緑地がある。その「静園」を真ん中に囲み、両側に数字順に一号院～六号院と呼ばれる中庭付きの古風な建物が六棟ある。三号院は西南の一角を占める。

1966年6月から、批判対象とされる歴史学部の教員たちは、毎日この場所で集合し、点呼を

まず未名湖畔を沿って、東グラウンド（図1）へ行った。1966年7月25日夜、全校教職員が参加する「万人大会」はここで開かれていた。郝斌教授はその場で毛沢東夫人の江青に名指しされ、「毛主席と江青の娘李訥を迫害した」という罪に問われたが、それは冤罪であった。この場所はまさしく郝斌教授の3年「牛棚」生活が始まった地点である。見学したこの日は晴天に恵まれ、グラウンドにサッカーを楽しむ学生のグループがいた。同じ場所での、50年前の出来事を今の若者にどのように伝えていくかを課題として感じながら、この場を離れた。

受け、キャンパスでの強制労働へ連れ出されていた。もちろん、何回かここで暴力的な場面も発生した。翻訳中の本書第4章「陰陽頭旋風<sup>8</sup>」で描かれた暴行、つまり強制剃髪もこの中庭（図3）で行われていた。中庭を通して我われは2階にあるバルコニーに上がった。1966年8月のある日、ここで郝斌教授を含む歴史学部の教員24人は、バルコニー外の排水槽で一列に並んで土下座させられ、中庭いっぱいに埋まった地方からやってきた革命群衆の前で批判を受けた。腰までの高さがあるこの欄干（図5）をど

<sup>8</sup>「陰陽頭」とは、強制的に右半分の髪の毛を剃り落とし、残った左半分の髪の毛も長短デコボコに切るという侮辱的なやり方を指す。こうして「陰陽頭」にされ

た批判対象は、日常生活の中でも一目で分かるようになる。



のように乗り越えていったか、今では考えられないと郝斌教授は言う。欄干外の排水槽は、大人一人がやっと立てるくらいの奥行である。当時は溝に石が敷かれ、鉄製の防水カバーもなか

った（図6）。図4は、中庭から2階建ての正面棟を撮った写真である。突き出している排水槽の上で、教員たちが土下座させられていた。



図4



図5



図6

三号院を出てさらに南に進み、当時の知名教授たちが住んでいた燕南園である。最初に訪れたのは燕南園50号（図7、図8）、当時の北京大学図書館長、歴史学部教授向達の居処。ここは三号院に一番近い。向達教授は敦煌研究で知

られ、文革の強制収容生活中に健康を損ない、入院治療が遅れそのまま他界した。竹林の向こうに見える建物は50年前と変わっていないが、中の住民はすでにはかの人が変わってしまった。



図7



図8



図9

続いては燕南園64号（図9）。ここは1966年の文革開始時に真っ先に批判を受けた歴史学部長翦伯賛の最後の住居であった。1968年に彼の待遇がやや改善され、再び北京大学内に住むことが許されこの64号に移ったが、およそ1か月

が経ったある日、軍服を着た人物が尋問のために彼の病床を訪れ、長時間にわたって厳しい尋問を行った。その夜、翦伯賛は遺書を残して夫人とともに服薬自殺した。66年から三年近く、いくつも苦難を乗り越えやっと好転を迎えたこ

の時期に、なぜ彼は死地に追い込まれたのか。真相は未だに闇に葬られたままである。

#### 四、記憶のかたち

インタビューの翌日、筆者はもう一度北京大学を訪れ、校史館を見学した。

百年以上に及ぶ北京大学の歴史のなかで、文革の十年間がどのように記録され展示されているかに、興味を持ったからである。

九段階に分けて紹介された北京大学の歴史の中では、文革の十年間はほかの時期に比べ、展示パネルの資料は豊富とは言えないが、幾つかの重要な数字や事実が確認できた。

文化大革命中、北京大学で不法な家宅捜査を受けたのは407戸（世帯）、のちに冤罪となったものは1059名、著名な学者翦伯贊を含む63名は

異常死した。四年間にわたって学生募集と教学が停止状態に陥り、多大な損失を被った。

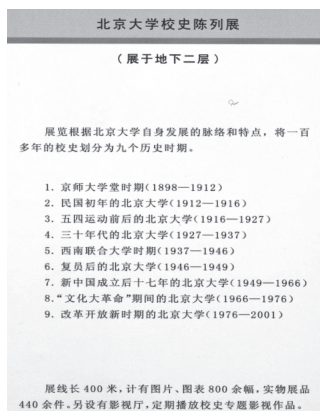
1966年10月、「黒幫分子に対する管理を強化する通知」が発表され、対象者は昌平区太平庄などに強制収容され、強制労働をさせられた。1968年5月、校内で「監改大院（つまり牛棚、筆者注）」が設立され、収監された幹部、教授は計218名。1969年春節の解散までに、収監者は各種暴行を施され、極めて厳重な結果となった。

1969年秋、北京大学教師と学生計7000名が、江西、漢中、北京遠郊の農村に連行され、再教育を受けた。そのなか、江西鯉魚洲農場へ行かれた教員と学生は2000名以上である。

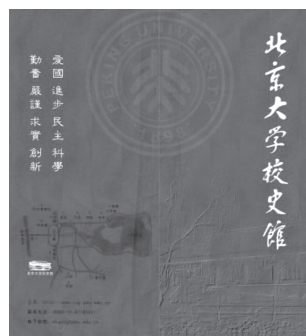
1981年6月の北京大学党委員会の報告によると、文革及び50年代の冤罪に対する名誉回復や事後処理はほぼ終了し、解決した事案は、2860件余りにのぼる。



校史館玄関



校史館パンフレット



翻訳を進めるなかで、当時の様子を確実に伝える資料をもっとたくさん見ることができれば、よりの確に文革の全体像を捉えることができると感じていた。インタビューの中で、歴史学部で当時に関する資料が保存されていないかを尋ねたが、郝斌教授は首を振り、そのような史料をみたことがないようであった。別の情報によれば、北京大学図書館や档案馆に文革当時

の学内新聞や写真などの資料が一部保存されていると聞いたが、非常に煩雑な手続きを取らなければ閲覧できないとも教えられた。残念ながら今回の限られた日程では無理なことである。今後の課題にしたい。

「牛棚」の記憶を残すために



北京大西校門外の壁に掲げているスローガン

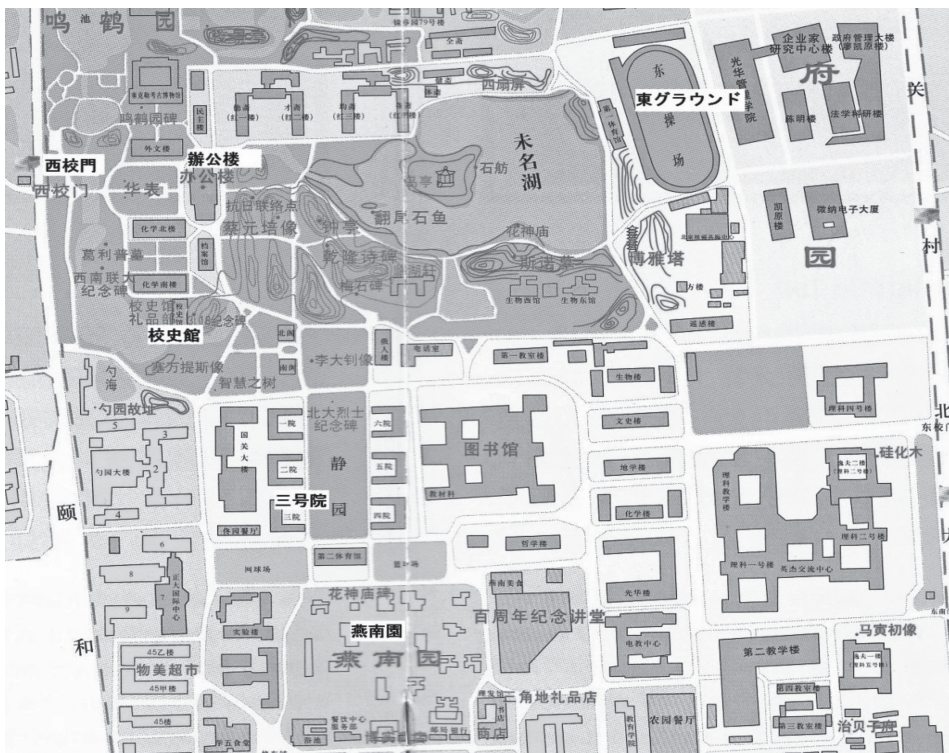
校史館の帰りに、北京大学の外壁に掲げている宣伝用のスローガンを思わずカメラに収めた。

「天下興亡、匹夫有責（天下の興亡、匹夫責あり）」一国の盛衰には、たとえ一般の庶民にも責任がある。明末清初の儒学者顧炎武『日知録』に由来し、清末民初の学者梁啓超により広げられたこのスローガンは、中国では小学生で

も知る言葉である。遡れば、この考えは儒家の始祖孟子にも辿り着く。

数千年の間、中国の読書人はこの教えを覚え、子孫代々、伝統を受け継いできた。学問の道も国の盛衰と固く結ばれたものであると、知識人は信じてきた。

時代の過ちを深く反省し記憶を正して、時は滞ることなく、邁進するであろう。



北京大学構内図（部分。筆者加筆。）



謝辞 本稿は、大阪経済法科大学アジア研究所  
2016年度の研究助成を受けたものである。な  
お、共同研究者である華立教授（大阪経済法  
科大学国際学部）に今回のインタビューに同席し  
て頂き、原稿の作成にも貴重なご意見を頂い

た。ここで郝斌教授、華立教授に謝意を表す  
る。なお、文内に引用した郝斌教授のインタビ  
ュー内容は、本文筆者がメモに基づいて和訳し  
たものである。